

JASIS

NEWS

No. 54

2014/9/15

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

「学会らしい仕事」とは

学会長 直井英雄（東京理科大学名誉教授）

先日の本学会総会のおり、「インテリア製図通則・同解説」がまとまったので学会として公表したい、との提案がありました。会長としてのコメントを求められた私は、とっさに、きわめて「学会らしい仕事」なので、ぜひ皆様の賛同を得て世の中に公表していきたい旨の発言をいたしました。

はからずも口をついて出たこの「学会らしい仕事」という言葉が妙に頭の中に残っていたところに、この会報の原稿依頼がきたものですから、そうだ、この稿では、本学会が蓄積してきた「学会らしい仕事」を私なりに振り返ってみようと思い立ちました。学会の今後の仕事を展望するためにも、そのよい「よすが」になるのではないかと考えたのです。私の記憶にもとづく、あくまでも個人の感想ですので、誤りや偏りなどがあるかもしれませんが、そのあたりはどうか大目に見てください。

「学会らしい仕事」の筆頭は、何といても毎年1回着実に積み重ねられてきた大会の開催でしょう。研究発表会あり、講演会あり、見学会あり、卒業設計展あり、表彰式あり、懇親会ありと、いくつもの学会らしい事業が総合的に実施される一大イベントです。ご承知のように、本年の北海道大会で26回を数えます。

これに勝るとも劣らない、学会の根幹をなす仕事は、学術誌・会誌等の刊行です。現在、「日本インテリア学会論文報告集」とこの「日本インテリア学会会報」が着実に発行され、また、本学会もメンバーになっているAIDIAの国際論文誌「International Journal of

Spatial Design & Research」の刊行の一翼を担うという仕事もしています。

学術出版物、学術資料等の刊行・公表という仕事にも、「学会らしい仕事」の蓄積が結構あります。思いつくままに挙げてみますと、学会設立10周年の節目にまとめられた「32人のインテリア論」（学会内部資料）、小原誠先生が力を注がれた「インテリア工事標準仕様書」（経済調査会）、学会設立20周年記念事業の一環でもあった「コンパクト建築設計資料集成インテリア」（日本建築学会編、丸善）、冒頭で話題にした「インテリア製図通則・同解説」など。また、現在進行中のものに、「インテリアの百科事典」（丸善で制作中）、先日の総会の席でも話のあった「インテリア環境カルテ（仮）」「近現代インテリア史（仮）」などがあります。いずれもきわめて「学会らしい仕事」といえましょう。

また、記憶に強く残っているのが、「学校家具のコンペ」です。たぶん学会初めての試みだと思いますが、これも高橋前会長が音頭をとった設立20周年の記念事業でした。

もちろん、これ以外にも、各支部の諸活動、研究部会活動、運営委員会活動など、学会になくはならない仕事がコンスタントに行われてきていることは、改めていうまでもありません。

こうして振り返ってみただけでも、先輩たちが積み重ね、さらに我々がそれに加えてきた「学会らしい仕事」には、相当な蓄積があります。誇らしく感じると同時に、これからもさらにそういう仕事にトライしていかなければならないと、気が引き締まる思いもあります。

ところで、これは私個人の意見ですが、そういう仕事に取り組む場合、基本的に大切なのは、世の中の役に立つものであるということももちろんなのですが、何より、取り組んでいる当事者にとって面白く感じられるもので

なければならぬのではないかと強く思うのです。将来に向けても、できるだけ楽しく、学会活動を進めていきたいものだと考えています。

■平成26年度大会（北海道）の概要

実行委員長 石橋達勇（北海学園大学）

本年度の日本インテリア学会第26回大会は北海学園大学（大会長・工学部長 杉本博之）にて開催されます。開催概要は下記の通りです。多くの方のご参加をお待ちしております。

1) 開催日時：

平成26年10月25日（土）～26日（日）

2) 開催場所：

北海学園大学豊平キャンパス7号館
〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
TEL：011-841-1161

大会内容・スケジュール

①学会：10月25日（土）13：00～18：00

〈見学先：北海道開拓の村、札幌聖ミカエル教会〉

解散場所：懇親会会場近辺

会費：3,500円

定員：45名

（申込み先着順、定員になり次第締切り）

②懇親会：10月25日（土）18：30～20：30

〈会場：ホテルオークラ札幌〉

（<http://www.sapporo-hotelokura.co.jp/>）

札幌市営地下鉄大通駅から3番出口右階段より徒歩約1分。見学会参加者はバス移動）

③研究発表会：10月26日（日）9：00～17：30

④記念講演会：10月26日（日）13：00～14：30

■平成26年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

去る7月26日（土）、平成26年度総会を千葉工業大学にて開催することができました。本年度は、役員交代の年であり、支部による評議員選挙の遅れが総会の大幅な遅

れになった。会員各位には、心からお詫びを申し上げます。

近年、支部活動、部会活動の低迷化がみられ、学会本来の姿に戻すべく、総務委員会として対応を試みてきた。お陰様で九州支部長、北海道支部長が新たに決まり、新支部長のもとで支部活動を期待したい。

学会顧問の島崎信先生に学会の活性化に関する検討をお願いしている。近いうちに提言が示されるが、その成果に期待をしつつ、会員の協力をお願いしたい。

丸善出版から当学会に『インテリア事典』の出版依頼があり、直井学会長を中心に編集委員会が組織され、学会員を中心に執筆依頼を済ませた。発行予定は、平成26年4月末である。

先日の総会にて、総務委員会の新委員長に白石氏の就任を報告させていただいた。学会の若返りを視野に、部会長、委員会委員長の就任に関する規定が必要であり、これについては、会長をもとに検討を加える計画である。

（前総務委員長 上野）

今年度から総務委員長を引き継ぎました千葉工業大学の白石です。これまで委員長をなされてきた上野先生のようにはいきませんが、学会活性化のために一步一步着実に進めていく所存であります。そうは言いつても、皆様からのご協力を頂けませんと前に進むことはできません。ご協力のほどよろしく願いいたします。

□広報委員会

委員長 湯本長伯（日本大学）

1) 広報委員会ホームページのサーバーを、九州大学から日本大学に移しましたが、2つのHPの存在が会員に混乱を生じるとの会長からの要請があり、広報委員会HPを閉鎖しました。最近では種々の掲載情報を載っていたので、事務局HPにも皆様の情報提供を引き続きお願いすると共に、アップデートの循環を守って戴くよう、事務局には切にお願いしたいと思っております。

事務局HP URL

<http://www.jasis-interior.jp/>

2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在58号）。メールアドレス登録者は192名で余り増えませんが、過去のニュースは広報委員会ホームページにすべて残してあり、追って見ることができません（現在は工事中です）。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

3) 今号の会報編集長は、委員会内部で連絡が悪く、松田奈緒子（大阪産業大学他非常勤講師）委員と湯本との共同編集です。今号から、年間発行回数を2回として原稿をお願いしています。総会后・大会前号と大会

後・発表概要座長講評号は中身がありますが、年報と称していたものは目的が明確でなく、また何時も原稿が集まり難いので、整理することにしました。予算等は、それによってさして楽になる訳ではないと思いますが、当面は本学会の現状に合わせて行かざるを得ないと考えています。ご意見下さい。

また会報に会員の意見を代表して反映載く編集委員ですが、北海道のメンバーが居られません。前号でも広報委員会への参加をお願いしましたが、北海道・四国そして九州等のメンバーを改めて募集致します。現状は、実質6名で頑張っているところです。

なお過去の会報は、ホームページ掲載を中止しましたが、事務局HPに引き続き掲載を委ねたいと思います。

4) 編集委員の募集

改めてのお願いとなりますが、会報編集の作業は、会報目次の作成と原稿依頼への準備、および原稿催促です。実際のレイアウト等は湯本が大学スタッフにお願いしており、編集長の仕事は企画と原稿依頼・督促関係の人的ネットワーク作業が中心で、直接の編集・レイアウト作業等の労働はありません。という訳で、意見や企画をお持ちの会員各位の積極的な参加をお願い致します。地域的なバランスや、年齢的な多様性も欲しいのですが、常任委員ということではなくても、ご意見やこれを掲載して欲しいという情報提供があると、大変に紙面向上の助けとなります。広報委員会へのご連絡は、当面は下記までお送り下さい（MLは追って変更予定）。

送り先メールアドレス

jasismailnews@yahoo.co.jp

□国際委員会

委員長 加藤 力（京都大学等非常勤講師）

今回はありません。

□論文審査委員会

委員長 松本直司（名古屋工業大学）

昨年度の論文報告集24号は、すでにご報告の通り5編の論文掲載となりました。本年度25号の論文応募の締め切りは昨年同様10月末日です。期日厳守でお願いします。背表紙がしっかり見えるような厚さになるように、どんどん応募いただきたいです。

論文審査委員会は、7月中旬から東アジア地区のインテリア学会関係論文集AIDIAの審査には行っております。応募数は7編です。本年は韓国への審査済み論文の提出が9月中旬となり、少々審査期間が伸びました。こ

れまで査読をお願いしました審査員の先生方にはたいへんご無理を申し上げていたわけですが、少々余裕ができました。よろしくお願いたします。

研究論文や調査報告あつての学会です。現在、審査委員会は私を含めて4名です。審査委員会の若返りと強化をはかるべく、若手や中堅および女性など新たな委員をお願いすべく思案中でございます。

よりよい論文報告集の発行に向けて皆様にはご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

■平成26年度日本インテリア学会 総会 議事録

（記録）棒田邦夫

日 時：平成26年7月26日（土）13：30～14：20

会 場：千葉工業大学 津田沼校舎

出席者：直井、加藤、上野、片山、金子、川島、河田、河村、栗山、桑原、小宮、清水（隆）、白石、高田、建部、仲谷、長山、早野、日原、平田、棒田、松崎、松本（直）、湯本（24名）

配布資料：

- 1) 平成26年度日本インテリア学会 総会資料
- 2) 平成26/27/28年度評議員・監事名簿

議 事：

1. 開会宣言（議事進行：白石）
2. 会長挨拶（直井英雄会長）
3. 定足数の確認（白石）

出席者は24名、委任状110通で合計134（定足数90）

となり、総会の成立に必要な定足数（会則15条）を満たしていることが確認された。

4. 議長団の選出

・議長団については事務局一任となり、議長：直井会長、記録：棒田理事、議事録署名人：平田、早野両理事となり、以後、直井会長が議事の進行を行った。

5. 第1号議案：平成25年度 事業報告および決算報告（案）の件

・上野総務委員長より、平成25年度の事業報告および決算報告（案）について、資料に基づき説明があった。佐藤・上野（弘）両監事による監査報告（白石代読）があり、平成25年度の事業報告および決算報告（案）は、資料1（P1）の通り賛成多数で承認した。

6. 第2号議案：平成26年度 事業計画（案）および予算（案）の件

・上野総務委員長より、平成26年度の事業計画（案）

および予算（案）について、資料1（P2）に基づき説明があった。

- ・予算については、学会の財政状況を考え、項目により5%減額している。
- ・役員選挙に関わる臨時理事会のため、今年度の旅費、通信費が上がっている。
- ・平成26年度の事業計画（案）および予算（案）について、資料1（P2）の通り賛成多数で承認した。

7. 第3号議案：平成26年度役員（案）および組織（案）の報告

- ・選挙管理委員会金子委員長から評議員選挙の結果報告があり（資料2）、97名の評議員について、異議なく承認された。
- ・評議員の互選によって、資料1（P3）のとおり理事が選出され、各支部長を加えた21名の理事が報告された。
- ・臨時理事会の結果、直井理事が会長に決まり、異議なく承認された。
- ・副会長は、直井会長の推薦により、加藤理事、西出理事2名の就任が承認された。
- ・新理事には、松本（吉）、鈴木（敏）、長山、金子の4名を会長推薦枠として加え、21+4名の合計25名とすることで承認された。
- ・監事については、新評議員による投票の結果、佐藤、上野（弘）両氏が信任されており、異議なく承認された。

8. その他

- ・上野総務委員長より、名誉会員の推挙について、日原、北浦両氏を、名誉会員として今年度大会にて表彰することが報告された。
- ・今年度大会（北海学園大学：札幌）について、歴史部会長の河田理事より、見学会の内容に関する報告があった。
- ・第21回卒業作品展を大会会場（北海学園大学）にて、例年通り開催する（教育部会）。
- ・棒田理事より次年度金沢大会の報告
2015年10月24日（土）、25日（日）に開催を予定している。北陸新幹線が開通し、距離が縮まった（東京から2時間半）。土曜日に発表と懇親会を行い、翌日講演会、見学会を開催する。
- ・各委員長、部会長の若返りが必要であることから、今年度限りで総務委員長を白石委員に引き継ぐこととする（上野）。
- ・小宮理事より、特別部会の扱いとCAD部会の位置づけについて質問があった。CADに関する部会活動としては、役目を終えたと考えられるため、平成25年度で終了し、必要な研究課題は、特別部会として立ち上げ、時限付きで短期に成果を上げる。

・早野評議員より、東北支部長就任の挨拶があった。

以上

■平成26年度支部だより

□東海支部

支部長 河田克博（名古屋工業大学）

本年6月14日（土）に東海支部総会が開催され、前支部長建部謙治に替わって、新たに今年度より3年間支部長の任を負うことになりました。よろしくお力添えのほどお願いいたします。

当支部では、この総会終了後、近年改築された「尾張一宮駅ビル」の見学会・講演会を、案内・講師を、篠崎亮平氏（山下設計）および杉山弘幸氏（一宮市中央図書館館長）にお願いし、約40名の参加で盛況裡に開催しました。当ビルは、いわゆる駅ビルの中に、公共図書館・市民イベント空間・市民サービスエリアなどを大きく取り込み、一般的な商業施設を極力押さえた点に画期的な特徴があります。建物の外から見える市民イベント空間、充実した閲覧システムを取り入れ、利用者層によって3層に区別・工夫されたインテリアなど、これからの地方駅ビルのあり方に一石を投じた、見所の多い作品でした。

またこれに先だって4月25日（金）に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会の主催で、インテリア文化研究所代表の本田榮二氏による講演会を開催しました。演題は「室内装飾の起源（ルーツ）をたどるー西洋と日本の壁装文化を中心としてー」で、文字通り壁装文化の変遷とその意味を考える、学術的にも大変興味深いお話で、63名の参加もあり好評でした。今後、総会や大会などで機会があれば本田氏をお招きし、インテリア学会会員にも是非視聴してほしい内容と考えます。



一宮中央図書館の児童書エリア

□関西支部

支部長 片山勢津子（京都女子大学）

評議員の改選を受け、関西支部の支部長・副支部長の選挙が行われました。これから平成28年度までの3年間は、以下の新体制で活動して参ります。どうか宜しくお願いたします。

支部長：片山勢津子（京都女子大学）

副支部長（総務担当）：ペリー史子（大阪産業大学）

副支部長（事業担当）：中村孝之（積水ハウス）

総務担当補佐：松田奈緒子（大阪産業大学）

事業担当補佐：山内一弘（今宮工科高等学校）

WEB担当委員：井上 徹（芦屋大学）

まず今年の活動として、9月28日（日曜日）に見学会を予定しています。見学先は、NPO法人子どもと住文化研究センター「住まいの絵本館」（大阪府吹田市）と緑の巨大モニュメント「希望の壁」（大阪市北区新梅田シティ）です。子どもと住文化研究センターは、元関西支部長の北浦かほる先生が理事長を務められ、「住まいの絵本館」は先生の長年の研究成果を社会へ発信する場として開館されたものです。また、「希望の壁」は安藤忠雄氏の環境都市大阪の実現を目指した緑化プロジェクトの一環として作られたものです。

なお、見学会の後は懇親会も予定しておりますので、多数のご参加をお待ちしております。

詳細は、支部HPでご確認下さい。

<http://www.jasis-kansai.jp>

□中国・四国支部

支部長 平田圭子（広島工業大学）

1. 支部総会

■日時：平成26年6月28日（土）

13：00～14：00

■場所：広島県立総合体育館小会議室

今回は、3年に一度の支部選挙後の総会であり、支部長、副支部長、幹事、事務局が正式に承認されました。支部運営は新幹事を中心に役割分担し、旧幹事のアドバイスも得られる強力な体制に整いました。

2. 総会講演会（支部会員による講師）

■題目：「インテリアデザインを考えるー情報空間を利用した実験を事例として」

■講師：伏見清香氏（広島国際学院大学）

■日時：平成26年6月28日（土）14：30～16：00

■場所：広島県立総合体育館小会議室

■参加人数：11名

都市のパブリックアート鑑賞を、携帯電話・iPod・iPad等の情報端末による解説を見ながら鑑賞し、自分の感想をその場で投稿してみんなで共有できるシステムの話など、「都市のインテリア」の一つの解釈の仕方を提示していただき、とても刺激的な時間でした。

3. ミニレクチャー（学生向け講演会）

■題目：「マルニ木工のインテリアデザインの方向性と新たな提案価値 ～歴史と革新・情熱の中で生まれたHIROSHIMAアームチェアストーリー～」

■講師：土井康義氏（株式会社マルニ木工 本社商品企画部長）

■日時：平成26年7月30日（水）18：30～20：30

■会場：マルニ木工広島ショールーム

■参加人数：28名



2013年度グッドデザイン金賞を受賞した

「HIROSHIMA」（デザイン：深澤直人）と名付けられた椅子の誕生物語を中心として、生活を楽しく豊かにするためのデザインのお話でした。かつてクラシック家具の製作で得た技術を使用し、デザイナー・プログラマー・職人等関わる全ての人のアイデアや技術の結集により、工場生産によるプロダクトデザインを世界へ発信して、作り続けているということです。

ショールームにある様々な椅子の中から、参加者は好きな椅子を選んで坐り、講演と同時に椅子の座り心地を味わい、とても豊かな時間を過ごすことが出来ました。

（ミニレクチャー担当：細田記）

□九州支部

支部長 森永智年（九州職業能力開発大学校）

この度、九州支部長を拝命することになりました森永智年と申します。現在、九州職業能力開発大学校に勤務しております。昨年、九州支部の中心的役割を果たしてこられた湯本先生が九州大学をご定年で退官され、日本大学に移られました。それに伴い、九州支部の運営に支障を来すこともあり、次の支部長が決まるまでのつなぎ役として支部長をお引き受けすることになりました。

微力ではありますが支部運営のために尽くして参りたいと存じます。皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

九州支部の会員数が現在9名にまで減少しております。これは、全国でも最小規模の状態であり、沖縄・熊本・福岡・大分の4県に亘って会員が点在していることもあり、集会を持つことも困難な状況にあります。当面の九州支部の活動は、活性化を図る上でも会員数を増やすことを目標に据え、学会への勧誘を進めて参りたいと考えております。つきましては、お知り合いに九州在住で当学会へ関心がありそうな方がいらっしゃるようでしたら、ご紹介をいただければ助かります。この紙面を借りて、勧誘活動へのご協力をお願い致します。

■平成26年度研究部会だより

□歴史部会

部会長 河田克博（名古屋工大）

〈見学会のご案内〉

すでに連絡されておりますが、今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2014年10月25日（土）（13：00～18：00頃）に札幌にて開催する予定です。見学場所は、北海道の明治村といわれる「北海道開拓の村」、およびアントニン・レーモンド設計の木造建築「札幌聖ミカエル教会」です。多くのご参加を期待いたします。

□人間工学部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

最近には年に一度の研究会兼見学会のみの活動になっておりますが、今年度も同様な活動を考えております。例年、関東中心のため、地方の方の参加が難しいこともあり、今年度は東京以外での開催を考えております。まだ企画段階であるため、開催時期等の詳細は決定していません。関心のあるテーマ等をお持ちの方はぜひご連絡ください。検討させていただきます。

□教育部会

部会長 河村容治（東京都市大学）

教育部会が担当する卒業作品展は、今年も大会に合わせて開催されます。会場校の北海学園大学とともに準備を進めております。現在のところ、40の教育機関（大学31・専門学校7・高校2）がエントリーしております。

また引続き、東京でも巡回展を予定しております。例年好評を博しておりますので、是非足をお運びください。

■第21回卒業作品展

日程：2014年10月26日（日）10時～16時30分
会場：北海学園大学 豊平キャンパス7号館
札幌市豊平区旭町4-1-40

■同巡回展

日程：2014年11月5日（水）～9日（日）
10～18時 ※最終日は16時まで
会場：タチカワブラインド銀座スペース・オット
タチカワ銀座ショールームB1F
東京都中央区銀座8-8-15 03-3571-1373
協力：タチカワブラインド
問合：日本インテリア学会教育部会 河村容治
東京都市大学 都市生活学部
kawayoji@tcu.ac.jp

□研究協議会

議長 栗山正也（KDアトリエ）

■25年度研究協議会報告

■常設部会活動

[歴史部会]

・大会時見学会計画・実施（詳細・部会報告による）

[教育部会]

・大会時学生作品展示（詳細・部会報告による）

■特別部会活動

[現代インテリア研究部会]

・現代インテリアに関する基礎一報告書まとめ
※26年度で終了

[インテリア環境評価研究部会]

・インテリア環境評価に関する専門家の意識調査
・評価手法「インテリア環境カルテ」の検討・研究
※26年度総会・部会活動報告にて詳細報告

■テーマ研究グループ活動

[日本近代インテリア史に関する記録・資料研究]

・研究機関、デザイン事務所、関連業界の歴史資料収集・整理
・資料研究の方向性確認、関連各方面からの資料を基に「日本近代インテリア史・年表」（第一次分：A0版4頁）を作成
※26年度総会・部会活動報告にて進捗状況報告

■26年度研究協議会計画

■常設部会活動

・通常の活動を継続、具体的内容は各部会で検討。

■特別部会活動

[インテリア環境評価研究部会]

・「インテリア環境カルテ」による評価方法の策定と

試行

※26年度中に研究のまとめを行う予定。

■テーマ研究グループ活動

[日本近代インテリア史に関する記録・資料研究]

・関連各方面からの資料を基に、「日本近代インテリア史・年表」をさらに充実して第一段階のまとめとし、キーパースン毎のヒアリング計画を立て、順次実施する。1WGで全てを終えることは難しいので、今後の継続的なワーキングの進め方について計画書を残す。

※学会の総体的な予算削減の中で、研究活動費もさらなる効率的な活用が必要であり、現況から継続研究を重視し、本26年度は新たなテーマ研究の募集は見合わせるようになった。

□現代インテリア研究会

部会長 長山洋子（文化学園大学）

2013年度の活動は、継続研究（現代インテリア100選候補の作品抽出）、有識者アンケート調査の実施、現代インテリアの見学会などである。

現代インテリア100選候補の作品抽出は、調査する年代を絞り2005年～2013年までの『新建築』掲載作品を対象に候補作品の選定、資料作成を行っている。手元がない古い雑誌は、東京大学図書館などを利用したが、スキャンが行えない、コピー代が高いなど難しいことも多いが、さらに継続して調査していく。

「現代インテリアとは何か」をキーワードに近代インテリアと対比される特徴とそれが生まれた要因を明らかにすることを目的として2014年1月に有識者アンケート調査を実施した。日本インテリア学会、インテリアデザイナー協会、インテリアコーディネーター協会、インテリアプランナー協会にご協力をいただき、さらに建築家、建築教育者にも協力していただいた。アンケートはメールで配信し、回収は52部だった。分析結果は10月の北海道大会で発表予定である。

現代インテリア作品の見学は、伊豆高原「ゆうゆうの里」、複合ビル「Z-one」の2件実施した。「ゆうゆうの里」は、富士箱根伊豆国立公園内の別荘地に立つ介護付有料老人ホームである。温暖な自然に恵まれた環境の中さまざまな共用施設やケアセンター、提携する内科診療所を有するもので、個室は3タイプ（約31～45㎡）あり入居金の他、月12万円以上の経費がかかるが、老後の暮らしの在り方として注目される。「Z-one」は、西武新宿線野方駅近くの商店街に立つ5階建360㎡の新築ビルで、オーナーの自宅に店舗と賃貸住居3戸を併設した複合ビルである。開口部の抑制されたガラス+木製ルーバー+パンチングメタル、きめ細かなバルコニーによる豊かな

インテリア空間、清潔で安心感のあるファサードは街並みに好印象を与えており、個人の住まいレベルでも住まいの豊かさと街の景観の両立に寄与できることがひと目で理解できた。

今後は、有識者アンケートの分析および100選候補作品の抽出を継続して行いながら、様々な現場調査を実行しつつ「現代インテリアとは」という奥深い難問の理解に努めていく。



Z-ONE

設計：SAITO ASSOCIATES（齋藤修一）
RC壁構造打ち放しのすっきりした外観



Z-ONE 住居部分

スタイリッシュなクローズドキッチンがこの建物のインテリアを象徴している。

最後に、現代インテリア研究会の活動の一環として小原二郎先生の新著「椅子の科学を考える」の記念講演に参加させていただいたことを報告する。

このご講演は学校用家具に始まり椅子のプロトタイプ研究に結実した成果を今回の「椅子の用途別3分類」に更新したもので、特に長時間連続的に使用する第3類（会議・劇場・乗物用）椅子の座り心地の評価・検討と改良策（座面の前後移動とランバーサポート）の提案は、今後の室内空間の居住性・快適性の鍵となると思われる。

インテリアの素材やエレメントの開発が現代インテリアの展開に大きなインパクトを与えてきたことは想定し

つつも個別のエレメントについて十分な理解は困難であったが、今回このように先進的かつ具体的な知見に接することができたのは本当に幸せであった。



小原二郎先生

(出版記念講演 2014.07.02. 岡村製作所ショールームにて)



駆け付けたインテリア学会会員等 (写真提供：川島平七郎)

□インテリア環境研究部会

部会長 加藤 力 (京都大学)

研究協議会の記事をご覧ください。

□日本インテリア近代史研究G

湯本長伯 (日本大学)
村上晶子 (同アトリエ/明星大学)

本研究プロジェクトは、昨2013年9月より実質の活動を始め、本日に至っているものである。少し長くなるが、これまで研究協議会以外には報告する機会が無く、学会会員各位には情報が無いということなので、少し詳しくご報告すると共に、よって本研究プロジェクトへの理解と参加も戴きたいと考えます。

本研究プロジェクトは、本学会・研究協議会の研究プロジェクト助成を受けて、欧米先進国に比してやや特

殊な成り立ちをして来た、日本のインテリア分野・インテリア界の、近代(明治・大正・昭和初期)における成長・発展過程を実資料の発掘と共に掘り起し、今後の我が国インテリアの方向性を考えるよすがとすると共に、それ自体貴重な資料の保全の一助にもなりたいと考える。

◇2013年度は、まずは研究プロジェクトの幹事役に該当するメンバーおよび協力者によって何度か会議を持ち、研究プロジェクトを進めるに当たっての戦略を数次に渡り議論した。それは、これまでも何度か同様の研究プロジェクト推進を試みながら、様々な事情によって挫折を繰り返して来た経緯があったからである。取り敢えずの幹事を、研究プロジェクト提案代表者の村上晶子(同アトリエ/明星大学工学部教授)を始め、栗山正也(KDアトリエ主宰)、湯本長伯(日本大学工学部教授)、川島平七郎(川島住環境計画主宰)とし、九州大学(有楽町)およびインテリア産業協会(新宿)において会議を重ねた。また栗山幹事が収集している資料の一部を検討材料に、資料のまとめ方のイメージについても議論を重ねた。最終的には膨大な資料塊を形成すると思われることから、そのインデックスとして先ず年表を作成し、そこに各資料をタグ付けることで、「全体像を掴みながら、各資料にアクセスできる形式」を、出来るだけ採用したいと考えに至り、その方針で研究プロジェクトに関わる委員や協力者をお願いしつつ、次第に研究プロジェクト作業を深めて行くこととした。

また関心有る方には研究プロジェクト委員になって戴くこととし、齋藤裕子(齋藤アトリエ)、高田静(フリー)両氏にも加わって戴くこと、日本大学工学部建築学科・建築文化社会構造設計研究室(湯本研究室)学生(小林寛大、白川敬晃、高野祥太、渡辺裕貴)にも、卒業研究の一環として加わって貰うことになった。

◇2014年度は、具体的な研究プロジェクト作業を進める年度とし、5月12日・九州大学有楽町にて第1回WGを開催し、幾つかの確認と意思決定を行った。

1) 研究プロジェクト方針の確認

インテリアの固有の質をきちんと捉える。インテリアの中身を例えば仕様書のようなものにまとめる必要も考える。これまで栗山氏を中心にやって来た「インテリア分野確立PRJ(インテリアの仕事/実態・要素・報酬・評価……)、インテリア工事標準仕様書、インテリアエコ診断、……)」も背景としてしっかり押さえる。仕事の在り様>職能>資格《IPインテリアプランナー、ICインテリアコーディネーター、商環境設計士、インテリア設計士、その他、KSキッチンスペシャリスト、MRMマ

ンションリフォームマネージャー、等々」といったことも背景として考える、等々。

2) 「本研究プロジェクト関係者メンバリング

幹事：村上晶子、栗山正也、湯本長伯、川島平七郎、齋藤裕子（齋藤アトリエ共宰）、高田 静（同アトリエ）／委員（研究プロジェクトキーパーソン）：松本哲夫（剣持デザイン研究所代表）、木村戦太郎（アトリエすぎのこ主宰）、岩井一幸（一般財団法人工芸財団理事長）／協力者：尾川正昭（前三越）、館野羊一（前高島屋）、加藤 力（前宝塚大学、京都大学非常勤講師）という案が出され、先ずはこの体制で進めて行くこととなった。なお尾川、館野、加藤の3氏には、既に資料や講演、原稿を戴くなど、ご協力を戴いていることを付記させて戴きます。また今回の記事を機会に、本研究プロジェクトに参加戴くことも大歓迎です。役割等については、研究グループ幹事会で検討させて戴きます（例えば、片山勢津子氏・関西支部・インテリア史研究者、小宮容一氏・関西支部・同種プロジェクト経験者／資料拝受）。

3) 参考資料の渉猟・収集対象リストアップ

◆諸協会：ファブリック協会、壁装協会、家具協会、インテリア産業協会、等々

「インテリアファブリックス（社・日本テキスタイルデザイン協会）」、「インテリア産業の現状（通産省生活産業局・総務課、住宅産業課）」

＞種々の資料を預かり、日大湯本研で整理・資料化する（聞き取りに先行して行く）

◆実物資料も重視して何かしらの形で扱う

＞朝香の宮邸（宮内庁営繕部）、国会議事堂（ステンドグラスは国産インテリア）、等々

◆インテリアエレメントの歴史 Ex. 型紙（日本＞ロンドン、欧米）等についても順次掘起す。

◆資料のまとめ方

◇作品・人とエポックを繋いだマップ（年表）を作る＞中心人物：剣持－松本哲－倉俣、等

◇JIDの系列 寺原芳彦、木村戦太郎、川上玲子、喜多俊之、等々

◇材料の変遷・製作法の変遷・担い手の変遷

◇IP、IC、商環境設計士、インテリア設計士、等々の団体を網羅する

◇百貨店 三越＞高島屋＞大丸 西洋風インテリアの嚆矢 百貨店の資料早目に整理

◇その他個別の系譜 テキスタイル中心……川島織物（京都）高島屋資料館（梅田？）

◇三越の資料（IP-TALK資料）三越（家具部＞建装部＞室内装飾部＞インテリア部）（尾川正昭氏）「インテリアへの取組みとその展望」（そのIV）－百貨店インテリア設計部の場合

＞ペリアンのバンブーチェア：本当は三越オリジナ

ル＞元々呉服屋、着物の絵柄を描くことが得意で、着物の絵柄＞家具などの絵＞インテリアの絵と発展、製作部を持っていたことが大きい

※なお既に収集した資料については、日大メンバーによってまとめ作業を進めており、A0版4枚の大きな年表としてまとめている。現在もまだ進行中であり、更に資料を増やしつつ充実させる。

4) ヒアリング等の研究作業

産業工芸試験所（現産総研）の指導、百貨店建装部（インテリア部）の先駆的取組み、インテリアに特化したデザイン事務所の定着、連携協働の場である各協会の系譜、インテリア産業の発展、といったコンポーネントに切り分けて、順次作業を進める。

◇キーパーソンである各委員から始める

・松本哲夫氏にお願いするポイント＝剣持氏と共に過ごした産工試の先駆的行政指導、剣持事務所を基軸としたデザイン事務所の発展と相互関連＋協力・分担体制、＋白石事務所、渡邊力事務所……等々の相互関連など

・岩井一幸氏にお願いするポイント＝日本で初の国立デザイン研究所である「製品科学研究所」の発展と転換。既に氏が整理している資料等も、本研究プロジェクトにタグ付けさせて戴く。

・木村戦太郎氏にお願いするポイント＝JID日本インテリアデザイナーズ協会元理事長としての資料と知見。また産業工芸試験所の評議員として、既に取り掛かっているという関連資料整理については、これも本研究プロジェクトにタグ付けさせて戴く。

※できるだけ同時発生している様々な関連プロジェクトを関係づけて、幅広い研究プロジェクトにして行くことと、それでも1990年代から企画して来た研究プロジェクトであり、やはり急がねばならない部分を考えて、研究プロジェクト内の優先順位を十分考えて行くこととしたい。

5) 本研究プロジェクトに要する費用の検討

◇本学会研究助成・5万円

◇日本大学研究費10万円程度が限度

これらを遣り繰りしながら、研究プロジェクトを進めて行くと共に、やはり寄付等も含めて研究事業予算の捻出も考えたい。

H25分JASIS助成（総額5万円）決算（主に会議費）については、研究協議会に報告済みである。

6) 学会への報告

◇54号（本号）会報に、活動内容概要を掲載、報告する

◇支部等との連携－各地で研究会を開催することを計画＞テーマ＝近代インテリアの系譜、等

※各地での資料発掘にも繋げたい。

◇支部委員候補の方々 関東＝川島平七郎／東北＝若

井正一／関西＝小宮容一／中国＝平田圭子／北陸＝
棒田邦夫、今後順次相談する。

◇関連シンポジウム開催 問題意識と情報の共有
・まずはキーパーソンのパネルディスカッション等を軸
に企画する。そこに向けて、研究作業を進めて行く。

ご意見ご希望がありましたら、随時お寄せ下さい。

(幹事湯本アドレス nagyumt@kyudai.jp)

■事務局より

事務局長 上野義雪（千葉工業大学）

事務局を引き受けて4年目を迎えた。事務局の押切さんの努力のお蔭で昨年度の会費収入の増加をみる事ができた。これは一時的な現象で、会費未納率の低下は、これまでにできなかったことであり、感謝に堪えない。また、事務局の円滑な運営は、押切さんを初め、総務担当の白石委員、松崎委員の尽力によるもので、ここに改めて御礼を申し上げる。また、総務に北陸支部長の棒田委員のお力もお借りすることになり、これまで以上に会員サービス型の事務局体制を確立したい考えである。

事務局のホームページは、松崎委員、棒田委員の下で、シンプルではあるが、必要な情報をお伝えすることができるようになった。これを機に会員のご意見を頂戴したい。

事務局への連絡手段をメール、電話、ファックスとしているが、専用回線の電話設置ができないため、携帯電話を利用している。そのために、押切さんには、携帯電話を持ち歩いていただいているため、会員からの連絡を受けやすい状況になっている。会費請求などで押切さんと電話、またはメールでやり取りをされた会員の方は多いと思われるが、是非、北海道大会の受付にて、一言、お声掛けをしていただけると嬉しい。

■連載『インテリアの行方』

森永智年（九州職業能力開発大学校）

一食環境としてのインテリア

「食」は人々を結びつける力がある。懇親の場には「食」がある。祝いの席にも「食」は欠かせない。「食」の環境は、ひとことで言えば食事を楽しめる環境ということかも知れない。では、「食」にふさわしい環境とは、どのような環境か、食環境としてのインテリアについて考えてみた。

食事が美味しく感じる食環境について女子大生を対象にした調査^(注1)がある。

それによると、食事を美味しく感じる一番の要因は親しい人と一緒に食事だという。それは、恋人であったり、仲良しの友達であったり、家族と一緒に食事だ。場所としては、清潔で落ち着ける我が家と自然のなかでの会話のある食事である。料理の内容は、母親の手料理で盛り付けにこだわったものだという事だ。

自分の育った「食」についての環境と照らし合わせてみると大いに肯ける内容である。私が子供のころに暮らした里山の家は、50平米にも満たない小さな官舎であったが、小さな庭が付いていた。庭先には柿の木があり、その下には親父が日曜大工で作った木製のベンチとテーブルがあった。テーブルの脇には四畳半ほどの白い帆布が張られたパラソルが置かれ、初夏から秋にかけて天気のよい休日の朝は、そこで朝食をとるのが我が家の習慣であった。夏は里山の澄み切った空気、秋が近づくと柿の落葉がベンチとテーブルを覆い尽くす。母の焼いたパンと父の手作りのソーセージが食卓を飾る。妹達と一緒に、その出来をあれやこれやと品評すると、父と母はいつも微笑みながら、僕らの他愛もない話を聞いていた。

夏休みには、小学校の友達や近所の人たちが野菜を持ち寄ってバーベキューや郷土料理を作って楽しんだ。夜になると飛び交う蛍、灯油ランプの匂い、果てることのない笑い声、そして最後は花火で終わる。

その後、地方都市の市街地に引っ越した。集合住宅形式の官舎であったが、少し広がって60平米である。しかし、思春期を迎えた子供が3人いる家族では少し手狭であった。

そこである日、母は台所からつながる居間に卓袱台を運び込んだ。長年馴染んだ食卓セットは古道具屋さん引き取られ、我が家の居間は消失した。

母に言わせると「居間」から「茶の間」へ進化したのだと云う。母の講釈では、そもそも卓袱台はしっぽく料理から始まり、大人5人が座して、程好い間合いと食するに適量の料理が載る絶妙の組み合わせだそう。確かに、食卓に比べると円卓であるだけに、対角線上に対峙する距離が等しく、近い。かといって、肩が触れ合うほどではなく、手を伸ばして酒を注ぎ交わすのに程好い距離感だ。鉢盛りや鍋料理だとその距離的効果は極めて有効に感じられた。また、卓袱台は卓を囲む人々の心理的な距離を縮め、食に向かう気持ちを共有することを促す効果がある。食が進み、会話が弾む食環境の要件を満たすとはこのようなことかも知れないと思う。

一方、地方においても都市化と核家族化の進行が家庭と地域のつながりを希薄にしている。家庭内でも、共働きや塾通いの子供が増え、家族一緒に食事ができない、しない家庭が増加しているという。地域とのつながりが

希薄になることは、単に人間関係の問題に止まらず、その地域の伝統・文化からも距離を置くことになり、地元への帰属意識をも希薄にすることにもつながる。また、ひとりの食事の孤食やバラバラ食事の個食は、好きなものしか口にしない固食や偏食に陥りやすく、人間関係をうまく取り繕えない子供になってしまう。

身土不二という仏教用語がある。これは、身（身体）と土（環境）は不二（不可分）の関係であるということ、人間もその土地の産物であり、暮らしているその土地の作物を食することで身体は環境に調和するという教えである。地元の食材で作った郷土料理を食することがその土地に暮らす人間を育てることを意味している。地元の食材で作る郷土料理を親から子へ、子から孫へ継承することで、地域に残る食文化を尊重し未来に伝えていく。その過程で、近隣や世代間の人と人を取り結ぶ機会が生じることに繋がる。

日本人は、春は花見、夏は鴨川の納涼床や貴船の川床、秋は紅葉狩りに芋煮会など自然のなかで季節を楽しむ食事が好きだ。しかし、自宅の庭でパーティーを開いて友人を招くことや、テラスやバルコニーで朝食を日常的に食環境として楽しむ習慣を持つ西洋人と比較すると自宅の外部空間を活用することが不慣れなように感じられる。

しかし最近では、街にはオープンテラスをはじめ、店内からつながる外部空間を活用した店舗が見慣れた風景となりつつある。住まいにおいても「外」とのつながりの場合は、住宅の洋風化による縁側や土間の減少に伴い、新たな「外」とのつながり空間の黎明として、ウッドデッキやコンサバトリー的空間が創出されはじめている。その場で繰り広げられる「家族」「季節」「近隣」と「出来事」の中心に「食」を据えることで、人と人を結びつける場を演出することが新たな食環境としてインテリアに求められているように思われる。

(注1)

中野久美子、加藤 力：テーブルスケープデザインに関する研究－2－食育とインテリアデザイナー、日本インテリア学会研究発表梗概集、pp63-64, 2008.9

■ 書評

※本欄は、広報委員会に寄贈戴いた書籍を会員各位に読んで戴く機会がないので、会報に書評（概要紹介）を掲載して代えるものです。内容等の照会は、広報委員会までお願いします

□古谷誠章（2014年）『建築家っておもしろい 古谷誠

章+NASCAの仕事』文屋

河崎昌之（和歌山大学）

著者の古谷誠章氏は現役の大学教授にして、学生時代の後輩である八木佐千子氏と設計事務所「NASCA（ナスカ）」を共同主宰する建築家、いわゆる「プロフェッサー・アーキテクト」である。

そこで評はいきなり、巻末付近の〈学生たちとの一問一答〉に飛ぶ。「建築家はいつ『建築家』になるんだろう」と学生。著者は答える－「そうこうしているうちに建築家になっちゃった」。本書は概ねこの“そうこう”だ。この一言が、その前のおよそ250ページにわたって、軽い筆致で綴られる。

「NASCA」立ち上げ時期から、ほぼ時系列に沿って、興味深い内容が並ぶ。コンペ（ティション）の当落、施主とのこと、大学の研究室や設計事務所の実際、周囲を巻き込むワークショップ、様々な交友と交流、加えて出張先のお楽しみと、幅広く、時に生々しい。著者がこれらをして建築家をおもしろいとするのは理解できる。建築を学ぶ学生が、自らを重ね合せ読める部分も少なくない。

同時に、種々雑多との印象もある。そもそも〈仕事〉なるものは種々雑多な物事の総体であるのかも知れない。しかしながら、オムニバスの記述は、やはり主軸を見えにくくする。その主軸らしき、建築を出会いの場とすることや、建築家は人を幸せにするために働くということも、著者のユニークな建築的提案を加味したとして、どうも新鮮味に欠ける。

豊富な内容は読者を選ばないが、手にする際は留意すべき点である

■ 各地各氏から 日本インテリア近代史特集

※本年度総会でも皆様の関心が高く、様々なご意見と情報が寄せられました。日本インテリア（室内装飾、室内装備、木材工芸……）近代史に関して、各地各氏から先ずは色々な資料の所在情報や取組みの情報を戴きたく、ご寄稿を戴いて行きたいと思えます。

※「日本インテリア黎明期に学んだ桑沢デザイン研究所とインテリアの仕事」というテーマで、高田紀久枝会員に原稿依頼を致しましたが、関係資料を整理してしまっただけという理由で、お断りがありました。ちょっと遅かったようで、このようなことが無いためにも、このプロジェクトは急ぐことも必要なようです。その他、色々な関連情報を戴きました。それらは次号にでも、また改めて掲載させて戴きます。

①日本インテリア界の黎明を導いた種々の資料を整理保存する事業

(岩井一幸／工芸財団理事長)

インテリア学会の皆様、御無沙汰しております。

日本インテリア近代史研究プロジェクトについてのお報告、拝見させていただきました。

どの程度ご期待にそえるかわかりませんが、こうした問題に対する現状認識や、理事長をしている工芸財団の取組みの紹介、重要な意味を持つ産工試や製科研の歴史等でも、協力いたしたいと思います。

取り急ぎ、ご報告申し上げます。

②日本インテリアの先兵だった高島屋百貨店インテリアデザイン史料を移管して

※著作権調整終了したので、本号以降に順次掲載

舘野羊一（舘野創作研究室）

日本インテリア学会関西支部会員

関西インテリアプランナー協会会員

元・㈱高島屋 関西設計室

・はじめに

5、6年前に、高島屋スペースクリエイツ㈱に保管されていた、多くのインテリア史料群を選別し、アーカイブス・高島屋史料館・に移管する依頼を受けた。大阪と東京にあり、東京の元同僚と約4年を掛けて選別、移管した。東京の史料も貴重であるが、私は主に関西勤務だったので、関西の移管史料を中心にお話をする。

百貨店はいつも平和で、笑顔で展開しているようだが、明治・大正・昭和の激動の時代を、他の企業と同様、苦しみ乗り越えてきた。だが、史料の表現は簡素なものである。例えば昭和4年の設計部記録に『大阪市電奉祝花電車』とある。何のお祝いかわからない。前年に昭和天皇の即位があったが、そのお祝いかもしれない。のちの年にも、神戸市電、京都市電の花電車も設計・装備したと記録がある。

移管した史料群は設計図書・竣工写真・研究記録書などである。公共建築・商業建築・会社建築、個人邸宅、ホテル、船舶などのインテリア史料であるが形態は様々である。設計図書は戦後の具体的物件のものが多い。僅かに史料記録として明治・大正・昭和戦前のもあった。(●お断りしておくが、これらの100箱を超える移管されたインテリア史料群は、ごく1部であり、まだ進行中で、未整備であるため、閲覧、公開は出来ない●)

インテリアデザイン隆盛の近年の大型物件、『宮崎シーガイア』等や、ホテル群と、得意のSC・商業施設など多くは、まだ部門管理下にある。色々な企業で、設計資料群は、単に収蔵されていたり、システム管理保管

されて居たり、様々な様子であろう。また、今回お話する史料は全てデジタル化していない物である。

関西インテリアプランナー協会で2回ほど、竹中工務店本店に保存の建築提案透視図を展示・閲覧会をさせていただいた。また京阪百貨店で平成8年頃、『建築画の世界』展・水彩画からC・G画まで・を開催された。『思いを形に』が企業コンセプトであることが、読み取れる感動画の展覧会であった。口の悪いアトリエデザイナーは、『企業内デザイナーは井の中の蛙だね。』と言われる。『何を言うか、企業を通じて広い世界を見ているよ。』と、反論するが、本会報でインテリアデザイン史を考えるにあたり、担当移管した史料も、一つの企業内のインテリア史料かな。とも思う。でも、インテリア近代史の一部として早速、語ってみる。

・第2話 ・完成予想図・ペル・10枚のお話・

コントラクト・インテリア事業では、設計3面図・材料見本帳などの設計図とともに、完成予想透視図が大切である。顧客に提案する前に、社内での提案提出の許可審査・プレビュー・を受けるためにも、作成する。高島屋設計部では、部員が完成予想図・ペル=パースを描けることを徹底的に訓練した。移管史料の中に、昭和14年頃に作成された10枚の『樞原丸』『出雲丸』・サンフランシスコ航路・日本郵船・の海外航路客船の客室透視図・パースペクティブ・レンダリング・が有った。昨年世田谷美術館の『暮らしと美術と高島屋』展でも展示された。(文末写真参照)水彩による、2消点透視図である。高島屋設計部の鈴木三一氏と安藤金一郎氏らによるデザインである。

この『樞原丸・出雲丸』の設計は、フランスのエコール・デ・ボザールで建築を学んだ建築家・中村順平・大阪西区京町堀の出身・がチーフである。山下寿郎と村野藤吾・松田軍平・前川國夫・久米権九郎・丹下健三らが参加してパースを描いている。前述の鈴木三一らの高島屋と、川島織物の川島甚兵衛もデザインで参加している。彼は織物研究で明治19年にヨーロッパを視察し、ゴブラン織りが伝統の綴れ織りと類似していることを知る。

昭和4年頃までの客船は造船所が三菱重工・長崎造船所(1857年・安政4年・長崎鎔鉄所として創業)でも、船体設計が英国社で行なわれたり、まして内装デザインは外国人にも乗っていただく北米航路や欧州航路であるため、海外設計社による、欧風インテリアデザインを採用していた。

1929年・昭和4年に日本郵船『浅間丸』の国辱船論争があった。国内造船所が、英国・ワーリン・ギロー社に内装設計・施工を発注するとの決定に議論が起こった。当時の東京大学・岸田日出刀氏、京都大学・武田五一氏等の意見は、設計者も国内に居り、施工会社も白木屋・高島屋・三越とあり、国内で出来る、と発言された。

今年の5月、三菱重工・横浜製作所で出版された昭和4年頃の『船のインテリア画集』が高島屋史料館に寄贈された。高島屋が設計コンペに参加していて、高島屋制作の透視図原画が保管されてきたこと、かつ画集に記載されているとの理由によるご寄贈である。原画をすぐに横浜製作所で拝見させていただいた。画集を拝見すると、すでに三菱重工・横浜ドックでは、昭和4年に秩父丸・日枝丸・氷川丸のインテリアデザインの国際設計競争をしていた。フランスのマーク・シモンズ社や英国のヒートン・タブ社、ウエアリング&ギロー社の外国設計社と共に、東京三越、東京高島屋、大阪高島屋、大泉社、川島屋などに、応募させている。また、三菱重工・横浜ドックの設計部も担当している。当時主催者側に居られた佐々木達三氏は、『残念ながら国内内装設計社のデザインは使い物にならなかった。』と述べている。しかし、この画集では高島屋の提案には採用された透視図として6枚あった。これらの国辱船論争も、設計コンペも昭和4年ごろのお話である。これらの歴史を積み重ね、英国・仏国からも学びながら、船舶インテリアは、造船所自体の設計部も、国内の設計社も、設計が進められるようになった。

樫原丸・出雲丸は、昭和14年ころ、設計された。大阪商船の和辻春樹氏の推薦もあり、中村順平はこの船以前から船内設計をした建築家である。日本独自の洋風インテリアデザインをこの樫原丸・出雲丸以前から設計していて、『現代日本様式』と呼ばれるデザインを指揮した。

高島屋アーカイブスに10枚残った原画は1部を除き、没になった第2案か、第3案である。採用された設計図は、依頼主の造船所経由で、船主に渡し、制作者には残らない。しかし、採用された完成予想図・パースは三菱重工(株)船舶技術部編『豪華客船インテリア画集』・アテネ書房出版・で見ることが出来る。中村順平の1等ラウンジのパース・ページ100と101ページ参照・は感動を呼ぶ素晴らしさで描かれている。船舶インテリアデザイン史は、建築のインテリアデザイン史の語り部ほど多く居ないが、建築と肩を並べて、多くの造船マンが歩み、高島屋も歩んだのである。

太平洋戦争までは、日本の客船は世界中を航行し、保有船数で日本郵船だけで、英国の、第一位・キュナード社と第二位・P&O社に次いで客船185隻、貨物船約30隻の200隻を超える、世界第3位であった。無数の豪華客船のインテリアデザインが名も知れない設計者により創作された。

これだけの保有船数を誇ったが、悲しいことだが、戦争で負けた時、日本郵船には6隻の貨物船と1隻の客船『氷川丸』だけになったと、日本郵船歴史博物館様に伺った。

前述の、2万7,700トン・220mの樫原丸・出雲丸は素晴らしいデザインで着工したが、戦争のため、昭和16

年、空母『隼鷹』と『飛鷹』に改築され、他の多くの豪華客船と同様、軍用船となり、戦火にまみれた。

ここでは船舶の完成予想図のお話をしたが、高島屋設計部の制作のパースは完成写真と共に未整理だがポジ・ネガで有る。原画がお施主に渡し手元控えの為である。お客様に『透視図通りに素晴らしく完成しましたね。』と言われたりしたパースである。(この稿、続く)



上 ・昭和14年頃・日本郵船 樫原丸・1等社交室・中村順平・設計(カラー)



下 ・昭和14年頃・日本郵船 樫原丸・特別室寝室・鈴木三作画(カラー)

③ JID元理事長としての近代史への想い

(木村戦太郎／アトリエすぎのこ)

JIDは1985年に「日本室内設計家協会」として発足し、1969年にJIDに改称。1977年にはIFIに参加し、1995年にはIFI' 95名古屋デザイン会議を開催。2008年には創立50周年記念式典を行い様々なイベント、記念出版を行っている。

私は2000～2004年の4年間、JID理事長を務めたが、当時は財務が危機的な状況にあり、固定費の削減と財務体質の改革にエネルギーを使い果たしたが、何とか危機は切り抜けた。

日本インテリア近代史を纏めようとする、作業は膨大であり、既にJID出版の書籍もかなりあるので、大変な作業になりそうだ。これらの出版物には私は作品提出

や作業協力はしていますが、執筆は殆どしておりません（私は元来「色と形の人」で、原稿は苦手です）。

50周年記念出版で纏まった文章を寄稿したのは、泉修二氏、清水忠男氏のお二人。泉氏は「日本の生活デザイン」も纏められており、清水氏をご存知の通りです。

インテリアデザイン関連情報は、50th記念出版の「日本デザイン50年」に詳しいので参照されたら如何でしょう。

※以下に、簡単なJID史をまとめました。

（公社）日本インテリアデザイナー協会の活動

■JIDの沿革

1958年 「日本室内設計家協会」を東京地区に設立

1969年 法人格を取得し「社団法人 日本インテリアデザイナー協会（略称：JID）」に改称する。

1977年 IFI（International Federation of Interior Architects/Designers = 国際インテリアデザイナー団体協議会）に参加する。

IFIは、インテリアデザインに関連する研究・調査、世界のデザイン教育に関する情報収集や情報交換などを行い、発展的な提案のためのグローバル・プラットフォームとして様々な活動を行っており、日本では、日本インテリアデザイナー協会（JID）、日本デザイン振興会（JDP）および国際デザインセンター（IdcN）が加盟している。奇数年に国際会議・総会が各国持ち回りで開催される。IFIの下にAPSDA（Asia Pacific Space Designers Association）があり、偶数年に国際会議・総会が開催される。

1995年 「IFI'95名古屋・世界インテリアデザイン会議」を、産デ振、国際デザイン交流協会、愛知県、名古屋市ほかの協力を得てJID主催で開催、関連行事として「グローバルインテリア展」「名古屋国際デザインコンペティション及び入賞作品展などが行われた。

2008年 JID創立50周年記念式典を行い様々なイベント、記念出版を行う。

「日本デザイン50年／Your Next Design」企画編集 JID、発行販売／木世出版社、初版1万部

泉修二氏による「デザインと社会の50年史」は社会とデザインの関係性を多面的に詳述されており興味深い。

記念シンポジウム「原点 こころのデザイン」講演者：出江 寛、吉岡幸夫、司会：桐山登志樹。

「ハンドドローイング展」展示デザイナー：剣持 勇／長 大作／豊口克平／永原 浄／新居 猛／松村勝男／水之江 忠臣／山口 道夫／渡辺 力、展示会場：新宿リビングデザインセンター OZONE 3F

★2013年4月に公益社団法人格を取得した。

■インテリアデザイン賞の授与

1969～1992年 協会賞：23年間に協会賞、特別賞、奨励賞が65件授与された。

1994～2002年 JID賞：インテリアスペース賞、インテリアプロダクト賞、研究・著作・業績賞、奨励賞、学生賞、大賞が8年間に56件授与（年平均7件）

2006年以降 JID賞ビエンナーレとして広報や冊子の充実を図り、2014年からはウェブ上での公募を開始し、応募作品の質が向上して毎回大賞が選択され、2010年からは入選枠も設けられた（2014年までの5回で32点が受賞し、13点が入選した。

■デザイン団体協議会（通称D-8）の活動

2000年 通産省デザイン政策室長からの提案で、年6回のD-8+関連組織の定例会議が持たれ、毎回テーマを決めて議論した。当初議論がかみ合わないケースが多かったため、D-8だけの会議も年6回設けて、デザインに関する徹底討論を行ってコンセンサスを志向し、D-8ウェブサイトも立ち上げた。

2010年 8団体による「ジャパンデザインミュージアム構想展」を銀座ミキモトホールで開催し、関連イベントやフォーラムを開催、2011年それら成果を纏め「DESIGNふたつの時代69s vs 00s」を出版した。

※D-8は現在も「ジャパンデザインミュージアム構想」委員会を継続し、8団体の委員が議論を重ねている。

2011年 東日本大震災の際はD-8で「復興支援WG」が組織され、経産省、日本デザイン振興会とも協力して、各協会の「復興支援活動紹介パネル展」「復興支援チャリティー」を行い、収益を「もも・かき育英会」に寄贈した。

④福岡インテリアコーディネーター協会・九州協議会総会講演

「インテリアの行方ー成熟社会のインテリア」

加藤 力（京都大学他非常勤講師）

まとめ：湯本長伯（日本大学工学部）

※福岡・九州でのインテリア学会の良きパートナーであった福岡インテリアコーディネーター協会・同協会九州協議会（会長：湯本長伯）総会で、加藤力氏からインテリア近代史プロジェクトにも関連する講演を戴いたので、併せてご紹介する。

0. はじめに

今回このような機会を戴いて喜んでます。湯本先生



とはここ30年以上、一緒にインテリアの諸活動について協働してきた方で、最も尊敬する先生の一人です。その地元の協会でお話し出来ることは、大変嬉しいです。今日は独特なところのある日本のインテリアの歴史を辿りながら、出来ればこれからのインテリアの在り方と一緒に考えてみたいと思います。



1. インテリアの30年 ICの発足

インテリアという言葉 小原二郎先生のこと
木土工芸からインテリア

インテリアという言葉を創ったのが小原二郎先生です。それまで木土工芸とか室内装飾とか呼ばれていた分野を、そのままでは駄目だということで新しい言葉を当てられた訳です。木土工芸は明治期の重要な輸出品の一つでしたが、その技術で明治政府は机と椅子を造り、イス座の生活環境を学校と云う形で実現しました。それが洋風化の象徴でもあったのです。小原先生は農学から出発して先ず木の材料学を研究、仏像の木材料研究などで成果を出され、次に人体・動作などの人間工学を米国から導入して先鞭を付けられました。そこからインテリアの研究全体に広がり、最期は住宅問題と住宅産業の研究をされました。その過程で、IC・インテリアコーディネーターやIP・インテリアプランナーの資格創設、試験事業の実施、さらに資格者の団体としてのIC・インテリアコーディネーター協会やIP・インテリアプランナー協会の設立を後押しされました。その実施に当たったのが栗山正也さんと湯本先生、そして加藤でした。木

材工芸とか室内装飾という名称より、ずっと本来の内容を現す良い名称になったと思います。特にICは、皆でテキストを創ったり講習会を3年間やったり、其の後に試験事業を実施したりしました。またIPにも皆で関わり同様にテキスト作りや講習会、試験事業などに汗を流しました。沢山の思い出があります。

2. インテリアの発見 ユカ座からイス座へ インテリアの発見 住宅・インテリア産業 インテリアの職能

インテリアという概念は、江戸時代までは無かったと言えます。そういう意味では明治期に、新しく発見したのものとも言えます。ご存知のように江戸時代まではイス座での生活習慣は無く、将軍でも床に座っていました。明治政府は日本の近代化を洋風化と捉えて、鹿鳴館を造ったりイス座の生活環境として学校を作ったりしました。日本のインテリアは、イズ座の環境を創ることから始まったのです。この進展には、産業工芸試験所（現産総研・産業総合研究所）や三越・高島屋などの老舗百貨店建装部の働きがあり、剣持勇などの先駆的デザイナーの活躍があって、次第に日本のインテリアは定着を始めました。これを一般人のものとしたのが、いわゆる住宅・インテリア産業でした。私たちは小原先生をお手伝いして、当時の通商産業省とインテリア産業協会を創ったり、IC・インテリアコーディネーター協会を創ったりしましたが、イン産協もIC協会も必ずしもうまく行っているとは言えないようです。ICもIPも日本では他に無いインテリアの資格ですが、その職能は未だ確立されているとは言えません。それがこれからの課題だと思います。

3. インテリアの専門家

室内装備設計士協会 室内設計家協会 インテリア
産業協会 インテリアプランナー協会 インテリア
学会

インテリアの専門家を育成する中で、色々な協会や学会が出来ました。その多くは小原先生が中心になって、設立したものです。室内装備設計士協会というのは、皆さん余りご存知ないでしょうけど、かなり早くに出来た古い団体で、主に関西地方で有力な団体です。その他にも室内設計家協会というのもあり、地方によって大分事情が違います。インテリアコーディネーター協会とインテリア産業協会はセットで出来たものです。当時の建設省所管で出来たのがインテリアプランナー協会で、一級建築士を所管する建築技術教育普及センターが事務的なことを行っています。他にインテリアデザイナーズ協会という作家的なデザイナーの人たちの集まりがあり、彼らはICやIPのように産業製品を使ってコーディネートするのではなく、ゼロから制作する作家的存在が多いで

す。学会としては日本インテリア学会があり（加藤氏は国際委員長、湯本先生は情報委員長）、日本では唯一の関連学会です。現在、湯本先生を中心に日本のインテリアが近代（明治期）に日本に入り普及して行く過程を、「日本インテリア近代史研究」として共同研究しています。今後の我が国のインテリアを考えるには、極めて重要な研究だと思います。

4. そして今、インテリアは インテリア教育の変遷 成熟社会におけるインテリア インテリア第2 世代 専門家達の役割 新たなインテリア空間 の創造

これからの社会は、成熟社会です。明治の近代化時代とは違う、第2世代のインテリアを考えて行く必要があります。既にモノは十分に在る中で、人々の心を満足させるインテリアを、専門家たちがその役割を果たしながら考えて、新しいインテリア空間を創造していかねばなりません。インテリア学会がその中心にならねばなりませんし、その中で専門家の集団が何を考え何を手掛かりに進めて行くのかが大切ですが、そのためにも改めてインテリア教育の充実が望まれます。インテリアの本質や、インテリアの技術など、共有が十分ではないことが多くあります。

5. 人はなぜ自分の部屋を飾るか？ 空間の自己化 テリトリー・なわばりの確保 空間・ものの持つ 意味 自己確認と自己実現 インテリアの本質

新しいインテリアを考えて行く中で大事なことに、インテリアとは何か？ということがあります。人にとってインテリアとは何なのでしょう？その手掛かりの一つに、インテリア心理学・社会心理学があります。人は何故インテリアを飾り整えるのか？研究として精神に若干の病気を抱える人や、精神のバランスを欠いている人の行動を観察すると、インテリアには「テリトリー・なわばりの確保」といった意味があり、箱庭療法などというものがあります。自分の現状（気持ち）の表出として部屋の自己化を図ろうとする行動が見られます。空間とかものの持つ意味には、そういうものがあるのです。つまりインテリアは、人間の自己確認と自己実現の場でもあるのです。こういうことがインテリアの本質であると考えています。

6. インテリア社会心理学の応用 自分のない／自分 でないインテリア 他者との差異、差別化 記 号としてのインテリア 空間可変行為 自己表 現欲求／化粧、衣服から

前述のように、インテリアには「テリトリー・なわばりの確保」という意味や、「自分の現状（気持ち）の表出としての自己化の対象」であったり、「自己確認と自

己実現の場」であったりします。そうすると、「他者との差異・差別化」を表現する場であり、そういう意味では自己を現す記号としてのインテリアでもあり、人が示す空間変換行為、自分の部屋を模様替えしたり新しいデザインに変えたりすることは、人が持つ自己表現欲求に沿ったものであり、化粧をしたり衣服を整えたりすることと同じような意味があると思います。先に述べた精神のバランスを欠いている人の行動観察研究の中で、全く「自分のない」インテリアや、どう見ても「自分でない」インテリアが表現されることがあります。これからの健全で価値のあるインテリアはそれとは反対のものであるべきで、正しく自分が表現されている良いインテリアをどう創って行くのか、そういうことを目指して行くべきだと思っています。

【まとめ】十分なお話しは出来ませんでした。これからのインテリアを考えて行く一つの手がかりについて、歴史を辿りながらお話しさせて戴きました。長時間、有難うございました。

【質疑応答・閉会】少し難しかったので、質問が余りないようですが、日本のインテリアの歴史に沿った深いお話と、これからのあるべきインテリアへの数々の示唆を戴いたと思います。長時間、誠に有難うございました。

(参考) インテリアの意味

1. 自己投影
2. 応援／支援
3. 自己目標
4. 自己証明
5. 変身／虚勢
6. 所属
7. 象徴
8. 自己同一性
9. 癒し／慰め
10. その他



⑤加藤力先生講演を聞いての感想、何を思ったか

樋口素子 (FICA*会員)

(*福岡インテリアコーディネーター協会)

「インテリアの行方」の講演を聞いて、木材工芸・室内装飾から、「インテリア」へと変化していった歴史背景を知りました。インテリアという概念が、進展・定着して行く過程で 専門家の育成が重要となり、摸索しな

がら現在に至っています。インテリアコーディネーター協会・インテリア産業協会・インテリア学会等、多くの方々の研究により進展してきました。

現状において、ICもIPも資格はありますが、職能が未だ確立されておらず、多くの課題を残しています。だからこそ、教育の充実や本質・技術を共有出来るように考えていくことが必要だとされています。

「自分らしく居られる空間」を創造するために専門家の役割をどう果たすべきでしょうか？個々の技術等の充実は欠かせないところです。今後は個々のみならず、異

業種・異分野との共同研究が新たな課題と可能性へとつながると考察します。海外のインテリアの歴史とは異なる「日本のインテリア」の行方は、色々な側面からのアプローチにより更なる付加価値が生まれると感じています。

最後にこれまでインテリアの諸活動に尽力されてこられた先生方に感謝するとともに、一人のICとして探求心を忘れずに、真摯に向き合って仕事をしていきたいと思っています。

■ 編集後記

松田奈緒子（大阪産業大学他非常勤講師）
湯本長伯（日本大学工学部）

今号は、総会后・大会前号ですが、総会およびそれ以降に色々ご意見を戴いた「日本インテリア近代史」研究プロジェクトについて、出来るだけ多くの皆様のご意見や関わりを集め、特集的にまとめてみました。かなりの広がりと深さがあり、また高田紀久枝氏からは、資料整理のため「泣きながら図面を破りました」というお手紙を戴きました。やはり急がねばならないと感じた次第です。

併せて多くの方々から声を掛けて戴いたり、資料を送って戴いたり、本当に嬉しく思っています。小宮容一氏からは、早速に資料の年表を送って戴きましたし、片山勢津子氏には仏パリから色々教えて戴きました。それにしても全体像は膨大なもので、どのように様々な部分を関係づけて行くかが重要なようです。思いがけず話はどんどん拡大中で、生きている間にどこまで行けるのかということのようですから、うーん……と、考え込んでいます。

学会会報54号は、今回も皆様に期限の協力を戴いて、半月ほどの遅れに止まりました。本当に、ご協力有難うございました。

湯本長伯（広報委員長・日本大学工学部）

前半は各方面の充実した報告内容、後半は豊かな提言や発信が盛り込まれた読み応え満点の号です。紙面全体を通して、学会員の皆さまに、どんな小さな声・力でもいいので、臆せず関わってほしいという思いが込められています。

恥ずかしながら、今号は全面、湯本先生の編集によるものです。次号は、少しでもお役にたてるよう頑張ります。肩肘張らずに、冒頭で直井会長がおっしゃっているように、私自身が面白く感じられるよう取り組んでいけたらと気持ちを新たにしています。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

松田奈緒子（広報委員・大阪産業大学他非常勤講師）

■日本インテリア学会会報第54号（2014. 9. 15発行）

編集者：松田奈緒子 佐藤恭子 湯本長伯

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：片山勢津子、平田圭子、松田奈緒子
丸茂みゆき、湯本長伯、若井正一

e-mail: jasismailnews@yahoo. co. jp

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 上野研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail: jimukyoku@jasis-interior. jp